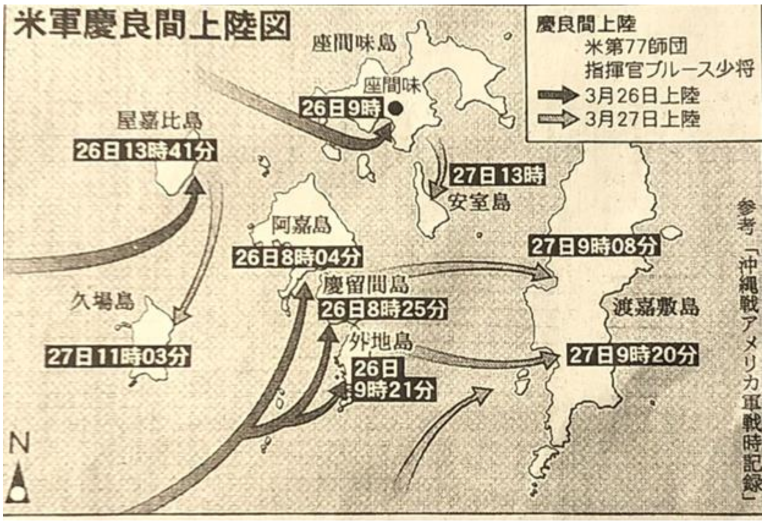
慶良間諸島の戦争



『沖縄戦新聞』2005 年 3 月 26 日（琉球新報）より

慶良間諸島は沖縄本島南部の那覇から西に約４０Km、東シナ海に点在する大小 20 余りの島からなる島嶼群である。

年に一度、沖縄の戦中・戦後史を学ぶスタディーツアーに参加して 3 回目の 2020 年 12 月 28 日（月）、那覇の泊港から慶良間諸島の一つである渡嘉敷島へ向かった。1945 年 4 月 1 日に沖縄本島の読谷の海岸に米軍が上陸し沖縄戦が始まった、と思っている人も多いが、米軍はこの年の 3 月下旬、すでに慶良間諸島に上陸していた。そこで何があったのか知りたいと思った。渡嘉敷島までは高速船で 40 分ほどだ。この日は、時折パラパラと雨が降る 12 月の沖縄にしては肌寒い朝だった。

到着後、吉川嘉勝さんの案内で『集団自決の碑』へ向かった。現在では子どもが自決することはあり得ない、等の意見から『集団死』と表現される。渡嘉敷島では 1945 年 3 月 23 日から爆撃が始まる。24 日、25 日には段々激しくなり、艦砲射撃も始まった。27 日午前、字阿波連の海岸と渡嘉志久から米軍が上陸してきた。27 日の夜、赤松元隊長から北山（にしやま）（キタヤマではなくニシヤマと読む）に集合命令が出る。吉川さんは 8 人兄弟の 8 番目で当時 7 歳だった。行く途中は大雨で、夜が明けるのを待って川伝いに歩いた。たくさんの人が集まっていて、親戚で円陣を組んでいた。艦砲射撃と弾が飛び交う中「天皇陛下、万歳」の声があちこちで聞こえ、手榴弾が爆発した。役場に勤めていた当時 16 歳の三男の兄と、長女の連れ合いの戦争帰りの義理の兄が手榴弾を持っていた。「これからやるぞ！」と信管を抜いて爆発を試みた。吉川さんは母親の膝に抱かれていたが、その瞬間母親が吉川さんに覆いかぶさった。そう思ったのは背中にぬくもりを感じ

たからだ。ところが手榴弾は爆発しない。

2度3度試みたが爆発しなかった。その後、母親は立ち上がって「死ぬのはいつでも出来る。人間は生きられるまでは生きるんだ。」といい死を免れた。実際の『集団死』の現場は、『集団自決の碑』の立つ場所から雑木林の奥へ入っていったところにある。渡嘉敷島では300人余りの住民が犠牲になった。家族の手によって首を絞められたり、かまや剃刀で切られたりして亡くなった。

慶良間諸島は海上特攻基地の島でもある。第32軍は渡嘉敷、座間味、阿嘉、慶留間の四島に㋹（マルレ）と呼ばれる特攻艇を300隻配備していた。米軍に制空権を握られてやむなく戦法を変更したのが海上特攻だ。ベニヤ製のモーターボートのようなもので敵艦に体当たりする『人間魚雷』である。米軍の上陸が予想される近くに隠して背後から体当たり攻撃をさせる。その秘匿壕を掘らされたのは朝鮮人軍夫たちだ。食べ物もろくに与えられず、爆薬もなく、固い粘板岩をつるはしやシャベルなどを用いて手掘りさせられた。

特攻艇秘匿壕跡

『アリラン慰霊のモニュメント』は1997年10月に建立された。沖縄全域には130か所もの慰安所が作られた。朝鮮半島などから連れてこられた多くの女性たちを「朝鮮ピー」と蔑称で呼ぶこともあった。渡嘉敷島にもあった。吉川さんの叔父さんの家は立ち退きにあい慰安婦宿にさせられた。当時、渡嘉敷島ではカツオ漁が盛んで、カツオの刺身は唐辛子で食べていた。立ち退きにあっても、豚小屋やヤギ小屋はそのままだったので、従姉と一緒に家畜にえさをやりに行くとき

に慰安婦のお姉さんたちに唐辛子を頼まれた。持って行くとお礼に金平糖をもらった。75 年経っても忘れることはない。

慶良間諸島を形どっているアリラン慰霊のモニュメント

渡嘉敷島から阿嘉島までは貸切船で約 20 分である。この頃には日が射して海の色がきれいに見えた。阿嘉島は、1945 年 3 月 26 日 8 時 4 分に慶良間諸島の中でも米軍が初めて上陸した島である。

現在の阿嘉港（米軍の上陸地は少し南西側になる）

阿嘉島では『集団死』はなかったが、老夫婦が日本軍にスパイの容疑をかけられて虐殺された。老夫婦は米軍に一旦捕まったものの解放されていた。その時米軍にもらった缶詰を日本軍に見つかったからだった。軍隊は自分たちの行動を密

告されるのではないか、と疑心暗鬼に陥っている。軍隊が住民を守らないことは沖縄戦が証明している。

阿嘉島から座間味島までは貸切船で約 15 分である。座間味島は現在、ホエールウォッチングの島として有名だ。この日もウエットスーツで船に乗る多くの若者の姿を目にした。

彼らは今、自分が滞在しているこの島で、かつて『集団自決』があったことすら知らないかもしれないと思うと何とも複雑な気持ちになった。

座間味島では 18 か所で 135 人が犠牲になった。手榴弾や剃刀で自らの命を絶つもの、住民同士が首を絞めあい、家族の首を切る。上記は座間味村の村長、助役、収入役とその家族 59 名が産業組合壕の中で集団自決したとされる地だ。

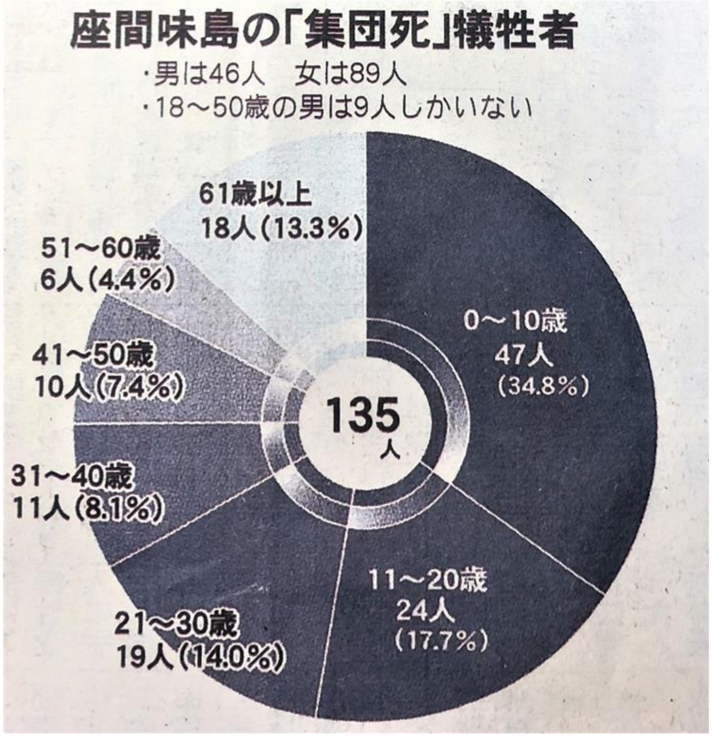
『集団死』が起きた島には共通点がある。日本軍がいた、ということだ。日本軍がいなかった島では、住民は米軍に投降し助かっている。これは、日本軍が住民に死を強制したことに他ならない。『軍官民共生共死』だ。徹底した皇民化教育で、天皇のために死ぬことは国民として最も大事なことだと教育されていた。

座間味島で犠牲になった 135 人のうちの 83%は女性と 12 歳以下の子どもだ。なぜ、女、子どもの犠牲が多かったのか。宮城晴美さん（沖縄ジェンダー史研究会）は、天皇制をベースにした家父長制に要因があったという。家父長制社会には、妻は夫の子どもを産むための存在であり「良妻賢母」思想がある。1944 年 9 月、座間味島に日本軍が駐留すると、島民は日本軍に部屋の一部を取られた。一つ屋根の下で暮らす島の女性たちは、民度を低く見られないために言葉使いや立ち居振る舞いにヤマトの「女らしさ」を体現する。そこに、朝鮮半島から連れてこられた日本軍性奴隷としての「慰安婦」の存在が島の女性たちの意識を変える。「娼婦」として蔑むことで貞淑な「良

『沖縄戦新聞』2005 年 3 月 26 日（琉球新報）より

妻賢母」としての優位性を確認する。

日本軍は、敵は野蛮な「鬼畜米英」だ。女は捕まれば強姦されると恐怖心を煽った。敵に汚されることは夫や家を汚されることと同じだと考え、命に代えても貞操は守らなければならなかった。亡くなった83%に無学な年寄りはいなかった。皇民化教育と家父長制社会がいかに犯罪的であったか、改めて問われなければならないと宮城さんは言っている。



『沖縄戦新聞』2005年3月26日（琉球新報）より

米軍が上陸したら女は辱めを受けるから、その前に自決せよ、と追い込まれたと聞き、私は「犯された女は恥ずかしい」という意識を作り出した社会こそが恥ずかしいのだと思った。天皇制に続く家父長制、男にとって都合の良い貞操感、「産めよ殖やせよ」の国策、何一つ女性が自己決定出来ない社会は最悪の結果をもたらす。そんなもののためにたった一つのかけがえのない命を捨てることがあってはならない。私たちは取り返しのつかない多くの犠牲を出してしまった沖縄戦から学ばなければならない。

それなのに現実はどうだろう。学校では「日の丸・君が代」が強制されている。国家が教育内容を統制する上意下達型の支配体制をつくり、抵抗する教職員をあぶり出し排除する「踏み絵」として使っている。教職員や生徒に起立という形をとらせることで、次第に心も服従させられると考えている。為政者への批判を封じ、「お上」に従順な国民に仕立て上げようとしている。

戦後の歴史教育は自虐的などとして、国家主義的な内容の歴史教科書が不透明な流れで採択されたり、道徳の授業では、特定の価値観を押し付けたり、生徒の忖度を促す評価をするような教科書で子どもの内心に干渉している。公民でも、ことさら「愛国心」を定義づけ、個人よりも国家の繁栄のために貢献することを押し付ける記述のある国家主義的な教科書がある。

夫婦同姓しか認めない国は、もはや世界で日本しかないが、選択的夫婦別姓を認めたくない権力者は、別姓だと家族の絆が壊れる、生まれた子どもがかわいそうだと根拠のない反対をする。妻の改姓が 96%を占める現実には目を向けない。ここで大事なのは、選択的ということだ。別姓を望む人は、同姓を望む人の権利を妨げてはいない。「日の丸・君が代」も強制に反対しているのであって、敬意

を示したい人が起立斉唱したいのを止めてくださいとは言っていない。

LGBT（性的マイノリティ）は生産性がない（国家にとって役に立たない）と発言した国会議員は辞めていない。

コロナウイルスで１万人以上の人が亡くなっている。未だ感染拡大を止められないのに、オリ・パラを強行しようとする政府。

沖縄戦は今も地続きだ。私たちは『日本国憲法』の主権者足りえているか。

嶋田由加里